

2021.04.01

サステナブル経営 レポート <第12号>

事業所周辺で行う with コロナ時代の生物多様性ワークショップの提案

【本号の概要】

- COVID-19 の感染拡大を背景として、生態系の健全性と人間の健康を促進する“OneHealth”という考え方が世界的にも注目されている。“OneHealth” 実現の前提として、人びとや企業、社会全体が、生物多様性やその価値、自身の生活や仕事との関係性、保全のための具体的な行動について認識することが欠かせない。
- 2020 年 10 月 30 日に、MS&AD インターリスク総研株式会社の社外活動として、従業員およびその家族を対象とした生物多様性ワークショップを実施した。
- 弊社での実践を踏まえ、企業およびその従業員を対象に、生物多様性という言葉伝えるのではなく、従業員にとって身近である事業所の周辺地域において、生物多様性やその自身との関係性を発見する with コロナ時代型の生物多様性ワークショップを提案する。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行を背景に、生物多様性の健全性と人間の健康との間のつながりを認識し、農山村や都市を含むあらゆる地域における生態系および人間と野生生物の関係を管理することで、生態系の健全性と人間の健康を促進する“OneHealth”という考え方が注目されている。

この考え方は、COVID-19 などの人獣共通感染症の増加傾向は、土地の劣化、野生生物の乱獲、気候変動といった抑圧による自然環境の劣化によって引き起こされているという整理の下、重要視されるようになっている。つまり、生物多様性保全の文脈だけではなく、将来のパンデミックの防止という文脈からも、人間と自然の関係を再構築することが求められていると言える。

“OneHealth”実現の前提として、「人びとや企業、社会全体が、生物多様性やその価値、自身の生活や仕事との関係性、保全のための具体的な行動について認識すること」が欠かせない。そのためには、生物多様性という言葉や定義を単に伝えるアプローチだけでは不十分であり、人びとが普段生活している地域や事業を行っている地域の中で、生物多様性および生活や事業との関係性を発見するアプローチが必要であると思われる。また、本アプローチは、COVID-19 感染拡大の状況下で遠出ができないという文脈からも、適切であると言える。

そこで本稿では、事業所の周辺地域で生物多様性を見つける with コロナ時代型ワークショップの実践例を紹介する。加えて、生物多様性およびその保全について、企業や地域、まちづくりや防災・減災との関連性も取り上げながら、分かりやすく説明する。

1. COVID-19 感染拡大を機に認識された“OneHealth”の重要性

国連環境計画（UNEP）は 2020 年 7 月 6 日、COVID-19 などの人獣共通感染症の増加傾向は、土地の劣化、野生生物の乱獲、気候変動といった抑圧による自然環境の劣化によって引き起こされているとし、将来のパンデミックを防止するための最適な方法として“**OneHealth**”アプローチが特定されたことを発表した^{1,2}。

元々の“**OneHealth**”という考え方は、「人間の健康」と「動物の健康」の両方が満たされている状態を意味するもので、「生物多様性や生態系の健全性」は強く意識されていなかったと思われる。しかし、2020 年 7 月 6 日に UNEP が発行した報告書では、「Human Health（人間の健康）」と「Animal Health（動物の健康）」の他に、「Environment Health（生態系の健康）」が要素として組み込まれており（図-1）、三者が両立することを“OneHealth”と呼んでいる。

生物多様性条約事務局が 2020 年 9 月に発行した「地球規模生物多様性概況第 5 版（GBO5）」でも、「The biodiversity-inclusive One Health（生物多様性を含んだ“OneHealth”）」と表現され、「生物多様性の健全性と人間の健康との間のつながりを認識し、農山村や都市を含むあらゆる地域における生態系および人間と野生生物の関係を管理することで、生態系の健全性と人間の健康を促進すること」³と説明されている。

One Health

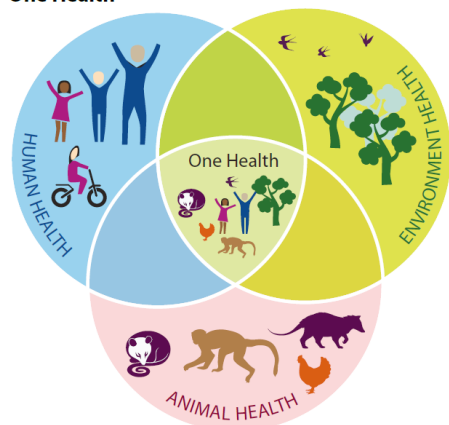


図-1 OneHealth の概念図

UNEP（2020）「Unite human, animal and environmental health to prevent the next pandemic – UN Report」より引用



The biodiversity-inclusive **One Health** transition: managing ecosystems, including agricultural and urban ecosystems, as well as the use of wildlife, through an integrated approach, to promote healthy ecosystems and healthy people. This transition recognizes the full range of linkages between biodiversity and all aspects of human health, and addresses the common drivers of biodiversity loss, disease risk and ill-health.

図-2 OneHealth の説明

生物多様性条約事務局（2020）「Global Biodiversity Outlook 5 SUMMARY FOR POLICYMAKER」より引用

¹ UNEP 「Unite human, animal and environmental health to prevent the next pandemic – UN Report」 2020 年 7 月 6 日：<https://www.unep.org/news-and-stories/press-release/unite-human-animal-and-environmental-health-prevent-next-pandemic-un>（2021 年 3 月 9 日閲覧）

² UNEP 「Preventing the next pandemic - Zoonotic diseases and how to break the chain of transmission」 2020 年 7 月 6 日：https://www.unep.org/resources/report/preventing-future-zoonotic-disease-outbreaks-protecting-environment-animals-and?_ga=2.199824362.559440934.1614823550-489602097.1614823550（2021 年 3 月 9 日閲覧）

³ 生物多様性条約事務局 「Global Biodiversity Outlook 5（地球規模生物多様性概況第 5 版）SUMMARY FOR POLICYMAKERS」 2020 年 9 月 15 日：<https://www.cbd.int/gbo/gbo5/publication/gbo-5-spm-en.pdf>（2021 年 3 月 9 日閲覧）

以上のように with/post コロナ時代においては、人間と自然の間のつながりを認識し、関係を再構築することは、生物多様性保全という文脈に限らず、将来のパンデミックを防ぐという文脈においても欠かせない事項となっている。

2. 生物多様性とは

ここで、あらためて生物多様性とは何か、生物多様性を保全する上で大切な観点とは何か、整理する。生物多様性という表現は、Biodiversity という英語を和訳したものである。しかし、元々Biodiversityという言葉も「Biological Diversity (生物学的多様性)」から「Logcal (論理的)」を除いてつくられた造語である⁴。生物多様性という言葉が生まれた経緯から考えても、言葉や定義をそのまま覚えることよりも、言葉が表そうとしているものや、その観点を、自分自身の生活や仕事の中で認識できることが求められる。

上記のことを踏まえた上で、生物多様性の定義を読み解いていく。まず、生物多様性条約においては、生物多様性は「すべての生物（陸上生態系、海洋その他の水界生態系、これらが複合した生態系その他生息又は生育の場のいかなるものを問わない。）の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む。」と説明されている⁵。この表現から、生物多様性は、「あらゆるスケール（遺伝子から地域まで）における変異性」であると読み取れる。そして、我が国の「生物多様性国家戦略 2012-2020」⁶では、このことを「つながり」と「個性」という言葉を用いて、より分かりやすく説明しようと試みている。「つながり」としては、生物間、生態系間、地域間などの空間上のつながりと、長い進化の歴史などの時間軸上でのつながりが挙げられている。「個性」は、個体、生物種、地域のそれぞれが異なる特性を持っていることであると説明されている（図-3）（図-4）。

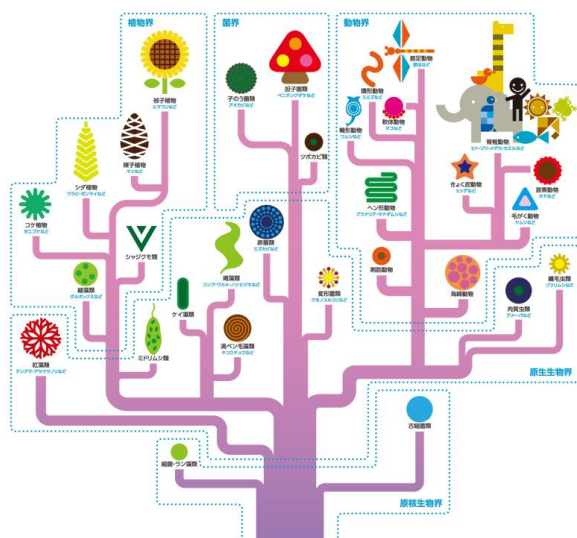


図-3 生きものの進化と生物多様性

環境省「みんなで学ぶ みんなで守る 生物多様性 Biodiversity」(<https://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/sokyu/sokyu01.html>) より引用

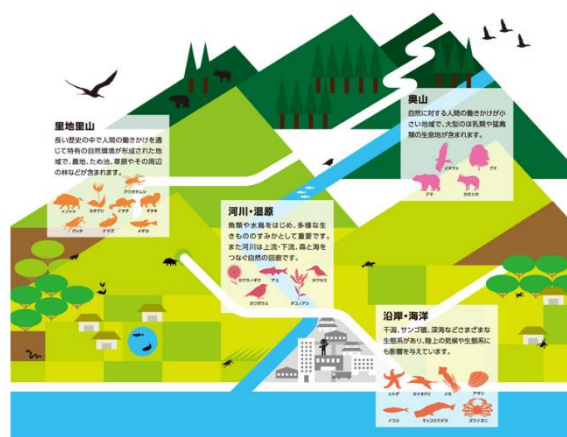


図-4 日本の自然環境と生きもののつながり

環境省「みんなで学ぶ みんなで守る 生物多様性 Biodiversity」(<https://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/sokyu/sokyu02.html>) より引用

⁴ デヴィッド・タカーチ（和訳：狩野秀之・新妻昭夫・牧野 俊一）「生物多様性という名の革命」2016年3月16日、日経 BP、東京

⁵ 生物多様性センター「生物多様性条約」http://www.biodic.go.jp/biolaw/jo_hon.html（2021年3月9日閲覧）

⁶ 環境省「生物多様性国家戦略 2012-2020」2012年9月28日：
https://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives/files/2012-2020/01_honbun.pdf（2021年3月9日閲覧）

以上の整理を踏まえると、生物多様性を保全する上では、遺伝子や生物や地域が持っている、長い歴史に裏打ちされた「個性」と「つながり」を、破壊しないこと、守ることが求められていると分かる。生物多様性およびその保全では「地域性」が鍵となるため、単に緑地や森林の量が一定確保されていれば良いということにはならない。都市や市街地であっても、人びとや企業およびその従業員が、関わりを持っている地域の特性を把握し、それをベースに自身の生活や事業のあり方について見直す機会を持つことが求められている。

3. 事業所の周辺地域で生物多様性を見つける生物多様性ワークショップの提案

ここまで、“OneHealth”および生物多様性の持続可能な保全活用を実現する上では、企業およびその従業員が、生活や事業のあり方について見直す際の観点のひとつとして生物多様性を取り入れることが必要であると述べてきた。しかし、実現するためには、生物多様性という言葉やその定義を一方的に伝えるアプローチだけでは不十分である。そのため本稿では、実際に普段の生活や事業の中で関わりを持っている地域の中で、生物多様性に関する発見をするワークショップを提案したい。本アプローチは、COVID-19 感染拡大の状況下で遠出ができないという文脈からも、適切であると言える。

上述したワークショップのテーマや詳細な方法は、各企業、各事業所、対象者に合わせて適切なものを考える必要がある。本稿では一例として、MS&AD インターリスク総研株式会社の社員およびその家族を対象に実施した事例をご紹介します。

2020 年 10 月に、MS&AD インターリスク総研株式会社の社員およびその家族を対象とした生物多様性ワークショップを実施した（表-1）。

表-1 生物多様性ワークショップの概要

実施時期	2020 年 10 月
対象企業	MS&AD インターリスク総研株式会社
対象地域	御茶ノ水駅周辺（都市域）
対象者	社員（殆どが御茶ノ水の事業所勤務）およびその家族 ※社員は新入社員から取締役／社長まで、部署も様々 ※家族はパートナーや子ども（0 歳～10 歳）
参加人数	約 40 名（スタッフ含む）
グループ分け	4 グループ（1 グループ約 10 名）
所用時間	約 1 時間 30 分
目的	・御茶ノ水のまちを鳥の生活という観点から再発見する ・御茶ノ水の事例を元に、ヒトと野生生物の関係のあり方を考える ・御茶ノ水の事例を元に、生物多様性に配慮したまちづくりを考える

弊社の東京の事業所は、御茶ノ水駅近辺に位置している（図-5）。毎年 1 回、若手社員による社外活動の企画・運営が行われているが、県外など遠方へ赴き、博物館などの学習施設で学芸員の方などに案内頂く形式が主流であった。しかし今年度は COVID-19 の感染拡大の影響が懸念されたため、東京都の事業所がある御茶ノ水周辺での開催を検討することになった。事業所から 5～10 分で歩いて行ける範囲の緑地などとしては、弊社と同じ MS&AD インシュアランスグループの損害保険会社である三井

住友海上火災保険株式会社（以下、三井住友海上）の駿河台本館・新館（以下、駿河台ビル）敷地内の植栽や屋上庭園、湯島聖堂の境内、神田川などがあるものの、殆どが舗装されて建築物が立ち並ぶ都市域である。

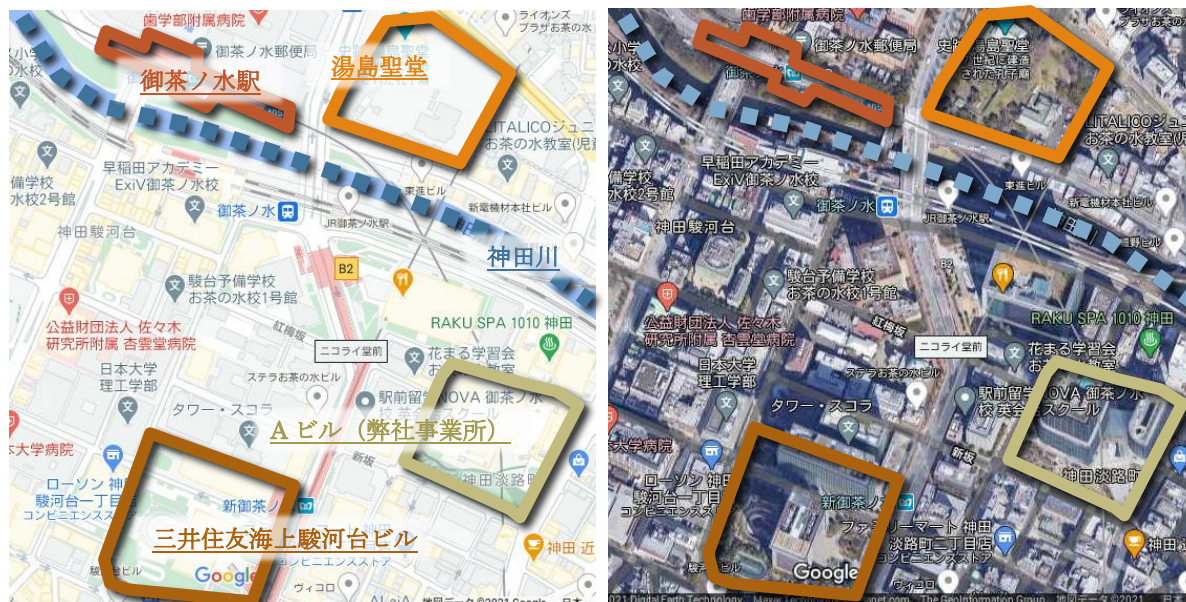


図-5 MS&AD インターリスク総研株式会社の御茶ノ水拠点の周辺

Google マップより地図・航空写真を引用、一部追記

ワークショップの対象者は社内に参加を募った結果申し込んだ社員（殆どが御茶ノ水の事業所勤務）およびその家族 40 名であった。社員の役職、所属部署は多様であった。参加家族は、主に社員のパートナー、子ども（0～10 歳）であった。なお、この当該 40 名には、ワークショップの企画運営を行った社員約 10 名も含まれている。対象者の役職、部署、専門分野、年齢などが多様であったため、子どもから大人まで楽しみながら生物多様性に関する発見ができることに留意する必要があった。

子どもから大人までの多様な対象者に対してフォローが行いやすいという観点と、感染症対策の観点から、約 40 名の参加者を 4 つのグループに分け、1 グループ約 10 名とした。フィールドワークを行う上での対象者の条件（子どもが疲れてしまう、ベビーカーを押しながら歩くことが負担になってしまう、等）などを考慮して、全体での所要時間は 1 時間 30 分とした。

対象地域が都市域という条件や、対象者の部署や年齢などが多様であるという条件などを考慮して、主に注目する野生生物を鳥類に設定した（選定理由の詳細は後述する）。ただし、鳥類の種ごとの名前や特徴を紹介するだけでは、御茶ノ水のまちと野生生物の関わり、御茶ノ水ならではの生態系などを発見することができない。そこで本ワークショップのメインテーマを「御茶ノ水のまちを鳥の生活という観点から再発見する」に設定した。

以下、対象地域や対象者の特性を考慮しながらワークショップを企画する工程と、ワークショップの構成、実践した結果など、詳細を報告する。

（1）ワークショップのテーマの決定

事業所の周辺地域で生物多様性に関する発見を促すワークショップには、様々な切り口が想定される。前項にて整理したように、生物多様性には様々な側面や要素が含まれており、地域によって扱い方が異なるため、汎用的な内容にしてしまうと、逆に抽象的になってしまう。試験的に、生物多様性のワ

ークショップについて、テーマの選択肢を整理した（表-2）。ここでは、扱うスケールと、着目するテーマという 2 つにまず大別して整理した。なお、ここで整理した項目は、完全に互いに独立のものではなく包含関係があることは留意する必要がある。

まず、スケールとしては、空間的なスケールと時間軸上のスケールが挙げられる。生物多様性の空間的なスケールには、遺伝子から地域まで様々なものが含まれる。また、時間軸上では、現在に着目するのか、過去から現在にかけての変遷や歴史を扱うのか、未来の検討まで含めるのか、といった様々なスケールでの扱いが可能である。

着目するテーマとしては、例えば野生生物に着目するアプローチが考えられる。野生生物にも、様々な生態のものが含まれるので、植物、哺乳類、鳥類といったグループの中から中心的に扱うものを選定すると分かりやすいと思われる。例えば哺乳類を切り口に地域の生物多様性を扱うとすると、対象地域に生息している哺乳類の情報、その地域における哺乳類の生活、人間が留意する必要のある哺乳類との関わり、哺乳類に配慮したまちづくりに関する検討などを取り上げることで、選定した野生生物の生態に対する理解が深まり、身近な地域を野生生物の生息環境という観点から見直すきっかけを提供することができる。

特定の空間に着目するアプローチも想定される。事業所など、対象地域内で着目する空間を選定し、その空間的な特徴や成り立ち、確認できる野生生物や、それらの野生生物にとって必要な環境などを扱う。身近な場所や関わりのある空間について、元々の地形や土地利用の変遷なども含めて成り立ちを理解し、野生生物の生息や地域の人びとによる活用といった観点から再発見し、今後のあり方や計画について見直す場となりうる。

さらには、地形やまちといった切り口も挙げられる。対象地域の地形的な特性や、人間活動による土地利用や地形の改変の歴史、その上で現在どのような特性を持っているか、といったことを扱う。生物多様性の基盤である地形的特性に理解を深めるとともに、地域における防災・減災に対して関心を持つきっかけとなる可能性もある。

その他にも、地域で保全されている野生生物や作物の品種をテーマとすることで、人間とそのほかの生物の関わりとその歴史を扱うこともできる。もう少し広い目線で地域を見て、対象地域とその周辺における緑地などの配置やつながりに着目し、生態系ネットワークを扱うことも考えられる。

表-2 事業所の周辺地域で生物多様性を見つけるワークショップのテーマの可能性

スケールの 選択肢	空間的なスケール	遺伝子、種、生態系、景観、地域
	時間的なスケール	過去、現在、未来
着目する テーマの選択肢	野生生物	植物、哺乳類、鳥類、昆虫類、両生類、爬虫類
	特定の空間	事業所、緑地、寺社仏閣、河川、地域で特徴的な場所
	地形、まち	地形、土地利用、まちづくり、土地と生物の関係性
	その他	地域で特徴的な野生生物や作物、生態系ネットワーク

前述した通り、ワークショップの対象者、対象地域、時間制限など条件を踏まえて、最適なテーマを選定する必要がある。今回の弊社でのワークショップでは、子どもにも分かりやすい野生生物に着目するアプローチとした。野生生物の中でも、季節や発見のしやすさ、種数が多すぎないといった観点から、鳥類を選定した。以上より、本ワークショップのメインテーマを「御茶ノ水のまちを鳥の生活という観点から再発見する」に設定した。

(2) 現地踏査とワークショップの詳細の企画

次に、ワークショップでの道順や、提供する話題などの準備をするために現地踏査を行った。現地踏査では、弊社の事業所がある A ビルや、レストラン街および屋外テラスのあるエリア（以下、B レストラン街）、湯島聖堂、三井住友海上駿河台ビルの 3 階屋上にある庭園とその周辺を回った。現地踏査で見つけた鳥類などを図-6 に示す。



図-6 現地踏査で見つけたものとその位置、ワークショップのルート

Google マップより地図を引用、一部追記

まず、①A ビル敷地内の植栽マスで、キジバトの巣を見つけた（図-7）。大きい植栽マスではないが、巣では子育てが行われていた（図-8）。事業所のすぐ近くにあることもあり、普段通勤時に通り過ぎていた従業員も多いと考えられたため、ワークショップの話題として取り上げることにした。

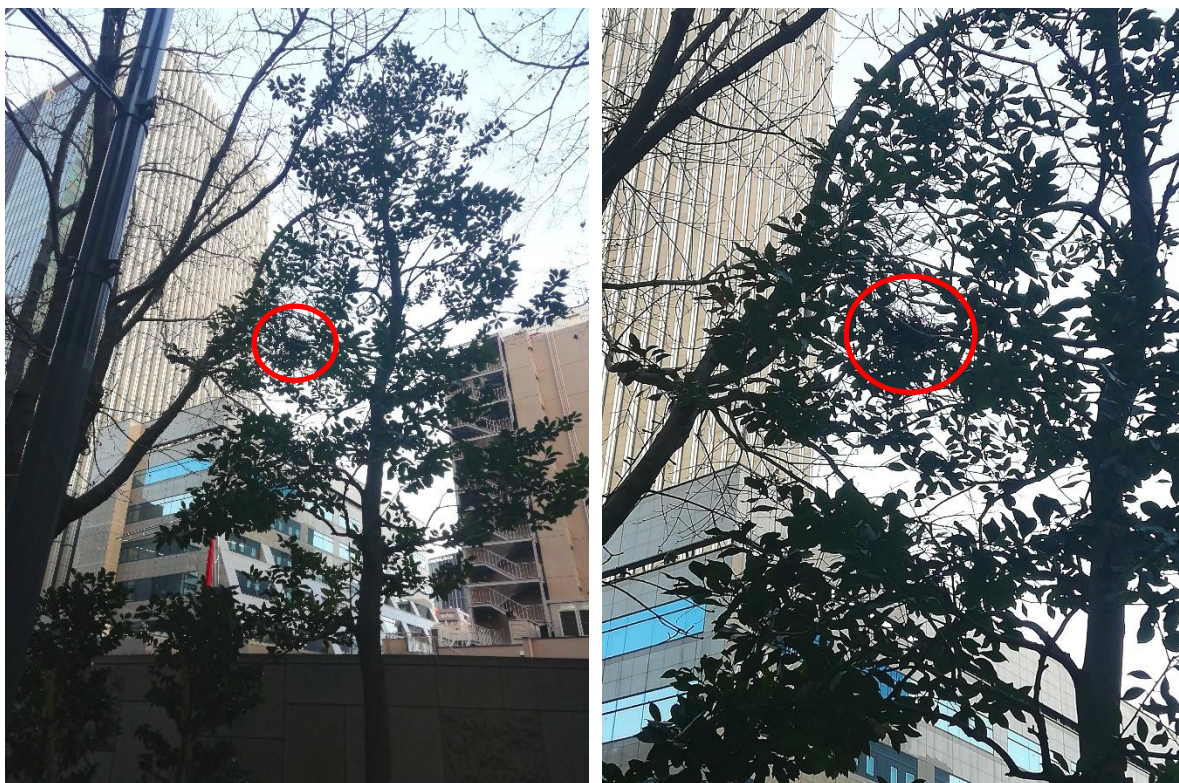


図-7 キジバトの巣（赤丸部分）

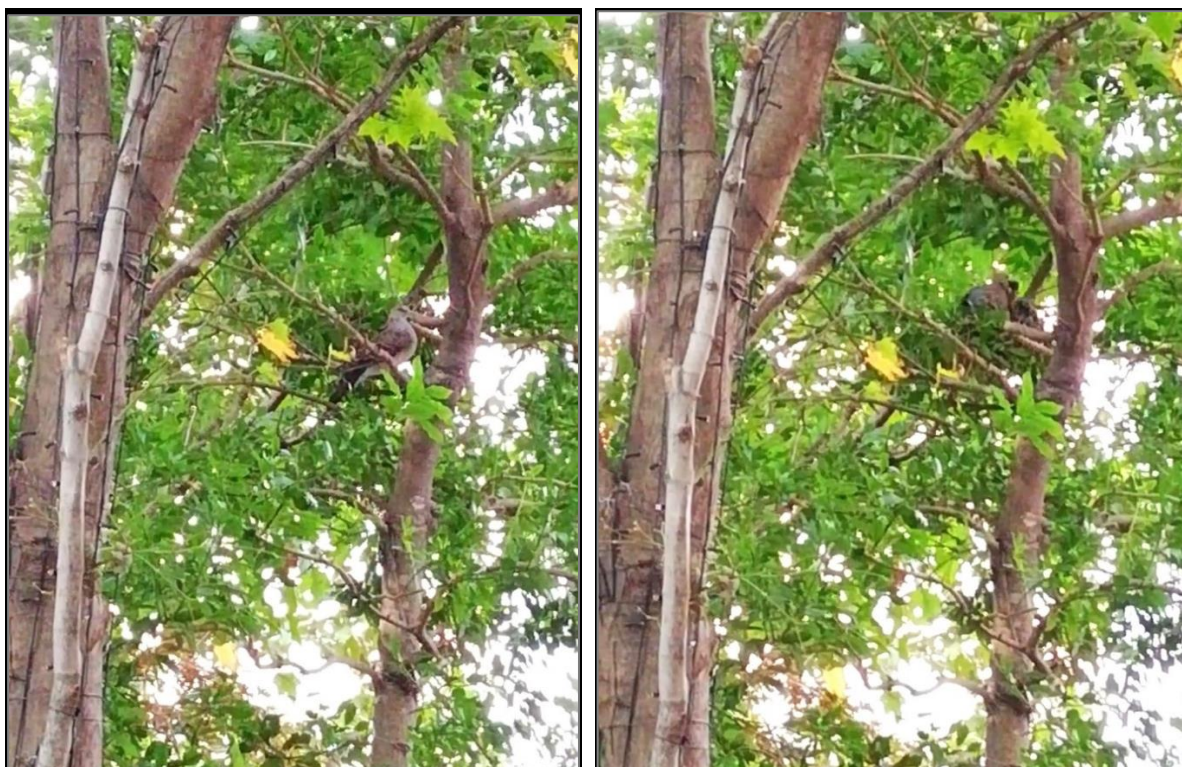


図-8 キジバトの親鳥と雛

次に、②B レストラン街屋外テラスにて、スズメを発見した（図-9）。B レストラン街には複数の飲食店が入っており、その一部が屋外に繋がったアトリウムのような構造になっている。昼食時には周辺の会社員などがテラスで昼食をとっており、スズメがその残渣や餌付け目的で放られた食料を食べている様子を確認できた。

野生生物に対する餌付け行為は、あらゆる側面から問題視されることが多い。まず、バードフィーダーなどで鳥が餌を食べるとその場所で糞をすることも多く、衛生管理が徹底されないことで不衛生な場所に多くの鳥が集まって食事をし、感染症などが流行する可能性が挙げられる⁷。他にも、本来野生生物が食べないような食料や、その地域にない食料を野生生物が食べることにより、野生生物の健康を害したり、生態系を悪化させたりする可能性が挙げられる⁸。

そこで、都市で巧みに採餌する鳥の姿を紹介しつつ、餌付け行為の懸念点について考えてもらう時間をワークショップで設けることにした。

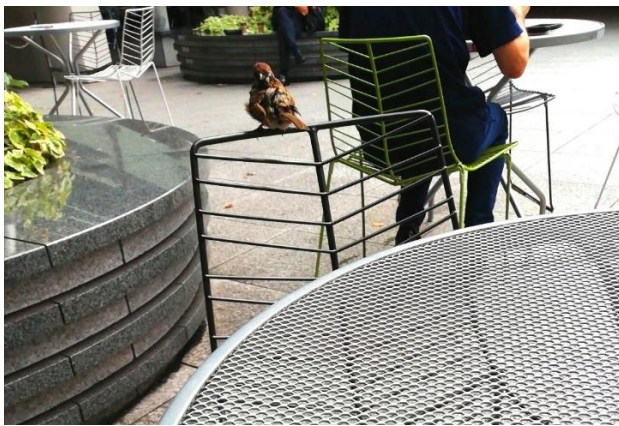


図-9 昼食時に人の近くにやってくるスズメ



図-10 聖橋南東のムクノキの果実

次に、聖橋の南東部に生える③ムクノキという樹木（図-10）に集まるドバトやスズメを見つけた（ドバトを野生生物と呼ぶかどうかは難しいところであるが、本ワークショップの主旨から考えてドバトも扱うこととした）。図-10のように、ちょうどムクノキは結実していた。この果実を、枝にとまって食べているドバトを確認することができた。果実は歩道や車道に落下しており、車道では果実が車に轢かれて砕かれていた。車によって砕かれた果実を、ついばんでいるドバトやスズメも確認することができた。このムクノキも通勤時に通り過ぎている社員が多いと考えられたため、鳥類にとっては重要な餌場として紹介することにした。

次に、④聖橋から東方向を見た時の景色（図-11）を取り上げることにした。河川や水路などは開けているため、鳥類が通り道として利用していることも多い。景色を見て、どのような構造になっているかを考えてもらい、鳥類にとってはどのような場所か考えてもらう時間を設けることにした。

次に⑤湯島聖堂の境内では、樹木が多いこともあり、姿は見えなかったがヒヨドリ、ジョウビタキなどの鳴き声を聞くことができた。また、境内の斜面地で草刈りが行われ、ドバトやキジバトが採餌に訪れていた。スズメは砂浴びをしている様子を確認できた（図-12）。寺社仏閣などの樹木がまとまって存在している場所は鳥類にとって貴重な休憩場所かつ採餌場所であること、草刈りなどの人間活動も巧みに利用している鳥の様子を紹介するため、取り上げることにした。

⁷ 日本野鳥の会「餌台（バードフィーダー）の管理について」2009年3月6日：

<https://www.wbsj.org/activity/conservation/infection/inf-birdfeeder/>（2021年3月12日閲覧）

⁸ 日本野鳥の会「野鳥～考えよう！広めよう！フィールドマナー その11 給餌でも気をつけよう～」2001年8月号：<https://www.birdfan.net/bw/manner/kyuji.html>（2021年3月12日閲覧）



図-11 聖橋からの景色



図-12 湯島聖堂境内の草刈りがされたばかりの斜面地

次に、御茶ノ水駅から南下する道路沿いの⑥エゴノキ並木では、エゴノキの果実を食べているキジバトを確認することができた（図-13）。エゴノキの果実は鳥類が好んで食べるとされ、この並木も鳥類に配慮して植栽されたものであった。鳥類の餌場として取り上げるとともに、まちづくりにおける野生生物への配慮の方法のひとつとして紹介することにした。

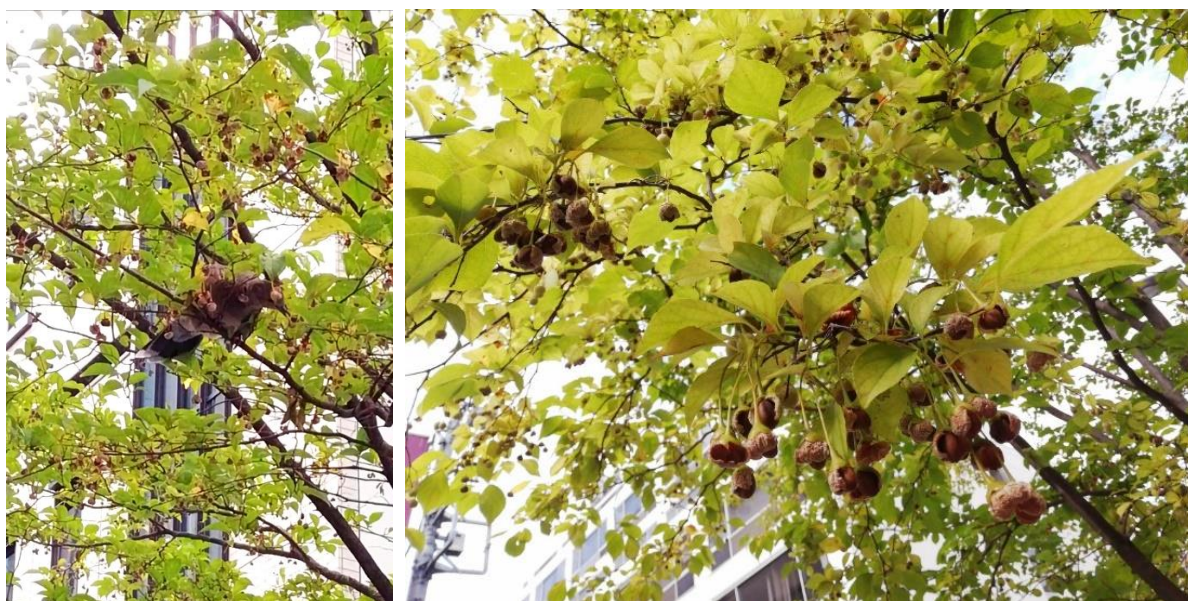


図-13 エゴノキの果実を食べるキジバト（左）とエゴノキの果実（右）

最後に、⑦グループ会社である三井住友海上駿河台ビル本館の屋上庭園では、ハナミズキの果実をついばむヒヨドリなどを確認できた（図-14）。当該屋上庭園では、野鳥を指標種として生物多様性に配慮した植栽、保全管理が行われており、巣箱の設置や鳥類の餌資源となる植物の植栽などの工夫がされている。その他にも、バードバス（鳥の水浴び場）を設置し、自動撮影カメラによるモニタリングが行われている。都会でも地域や企業として取り組める、野生生物に対する配慮や生物多様性の保全について紹介するために、ワークショップの最後に立ち寄る場所に設定した。また、屋上庭園には限界が

あること（河川などの水系との接続は困難であるため水中移動生物などの誘致は難しいこと等）、都市の中の緑地にも限界があること（広大な面積の緑地を必要とする生物の生息は難しい等）についても考慮の時間を設けた。その上で、今後も身近な地域の野生生物や特性に目を向けて、人間との関わりについて考えてみてほしいことを伝えてワークショップを結んだ。



図-14 ハナミズキの木にとまるヒヨドリ

以上事前の現地踏査で見つけたものをワークショップのストーリーに組み込み、図-6 に青色点線で示したようなルートを設定した。

（３）マップと資料の作成および当日の運営

参加者である社員やその家族が自宅に帰っても見返すことができるように、あるいは活動中にメモしたいことができた場合にメモしてもらえるように、マップと資料を作成した。マップおよび資料は、主に子どもが読んで理解できる内容とした。

当日の運営では、案内役として１グループに２人以上のスタッフが付いて回った。設定したルートとテーマ、資料の内容を基本としつつ、スタッフから一方的に伝えるのではなく、参加者に発見や考えってもらう機会を提供する姿勢を心がけて運営した。

ワークショップの冒頭では、図-15 を使用し、御茶ノ水という地域が、鳥にとってはどんな場所なのか、発見するというワークショップの趣旨を説明した。ここで、ヒトにとっても鳥にとっても生きていくために必要なものと考えてもらう短いワークを行った。その上で、ヒトと鳥それぞれにとっての、①休める場所、②食べるもの、③休める場所や食べるものを探して移動する道、とはどのような場所なのか考えてもらう時間を設けた。冒頭にこの話題提供を行うことで、普段は考えたことのない切り口でフィールドワークを行ってもらうことを目論んだ。

お父さんお母さんが働いてるまち： 御茶ノ水（おちゃのみず）は、 鳥（とり）にとってどんなまち？



- ヒトも鳥も、生きていくために必要な場所・ものはなんだ？

だれにと って	① 休めるばしょ	② 食べるもの	③ ①②を探して いどうする道
ヒト	おうち、ホテル	いろいろ 農家⇒スーパー⇒ おうちやレストラン で食べるもの	電車、自動車道、歩道
鳥	公園、建物、 海辺、川辺など	木の実、虫、小動物	開けた場所 例えば川、空の上

図-15 ワークショップのメインテーマの説明資料

マップ（図-16）には場所の名前に番号を付記し、それぞれの場所について話題提供を行う資料（図-17）との間で、番号で簡単に参照できるようにした。それぞれの話題提供スポットに到着した際には、図-17に示したような資料を用いて、場所の観察を参加者に促した。例えば神田川では、人間がその場所をどのように利用しているのか、鳥はどのように利用しているのか、観察に基づいて考えてもらうところから話題提供を始めた。その他のスポットにおいても、まずは参加者に観察や検討をしてもらうところから始めた。



図-16 マップ

「神田川（かんだがわ）」にとうちやく！ ここは鳥（とり）にとってどんなばしょ？

- ① まずは「御茶ノ水（おちゃのみず）マップ」で「神田川（かんだがわ）」を探してみよう！
- ② 「神田川（かんだがわ）」をよく観察（かんさつ）してみよう。ここはヒトにとってはどんなばしょ？
- ③ 鳥（とり）がいなくて探してみよう。見つけたら、何をしているか見てみよう。

- ヒトは、どうやっていどうする？
⇒ でんしゃ、くるま、あるく、じてんしゃ…
- そのためには、何がひつよう？
⇒ いろいろあるけど、「**通るばしょ**」＝「**みち**」がひつよう！
- ヒトは、いどうするために「みち」をつくる。じゃあ、**鳥は？**

図-17 到着時の話題提供資料

その上で、例えば B レストラン街では餌付け行為について（図-18）、駿河台ビルの屋上庭園では鳥などの生きものが利用しやすくするための工夫について（図-19）、考えたり、探したりする時間を設けるようにした。

ヒトが鳥（とり）にエサをあげることは、いいこと？わるいこと？

- 答えは、「いいことでも、わるいことでもないけれど、**気を付けなければならないことがある**」でした！
- エサを食べると鳥は〇〇をする
⇒ 答え： ふん（うんち）
- 「ふん」がいっぱいついた場所で、鳥がごはんを食べると…？
⇒ 答え： 病気（びょうき）になってしまうことがある
- 鳥にきたないばしょでエサを食べさせるのは、キケンがある。
- 鳥はふつう、どんなものを食べる？
⇒ 自然のなかにある木の実や動物など
- ヒトが食べるごはんやおかしは、鳥がふつう食べるものとちがう。だから、鳥にはうまく消化（しょうか）できないこともある。
- エサをあげるときは、**よく考えてから**にしよう。



鳥（とり）や生きものが使いやすいように 色々な工夫（くふう）がされたばしょ

- 駿河台緑地（するがだいりよくち）でどんなもの、見つけた？
- 鳥が好んで食べる実がなる木
- 巣箱（すばこ）
- 池（いけ）
- かれた木
※かれた木が好きな鳥のため
- 見えないところにあるバードバス（鳥のシャワー）
- ネコよけの竹ぼうき
※鳥がのんびりシャワーできるように
- 駿河台緑地（するがだいりよくち）では、特に鳥などが使いやすいように、色々な工夫をしているよ。



図-18 餌付け行為についての資料

図-19 生きもの配慮についての資料

屋上緑地（おくじょうりよくち）を 使える生きもの、使えない生きもの

- 屋上（おくじょう）にやってくるためには？
⇒ 答え： **とぶ / のぼる**
- どんな生きものがこの屋上（おくじょう）に來ていると思う？
⇒ 例えば： **鳥、トンボ、チョウ、ネコ、ネズミ、植物**
- はんたいに、來られない生きものは？
⇒ 例えば： さかな、タヌキ、飛べないのぼれない虫…
- ◆ 今日は鳥（とり）の生活について考えてみました。
でも**生きもの**ってほんとうに**色々なもの**がいます。
それぞれの生きものにとって、**どんなふう**に生活している**のかな？**ということ、みんなの住むまちでも考えて、
いろいろな**たのしい発見**をしてみてください！

図-20 ワークショップの締めくくり

ワークショップの最後は、屋上緑地を利用できる生きものと、利用できない生きものについて検討してもらってワークを行った。屋上緑地での工夫を見せただけで締めくくってしまうと、これ以上の工夫の余地がないように感じられてしまうことが危惧された。今後の生活や仕事の中でも、野生生物の生息や、生物多様性との関わりについて意識して考えてもらえるように、図-20 のような資料を用いた。

（４）成果

スタッフを含む参加した社員およびその家族は、身近な場所を鳥類の暮らしという観点から再発見したことで、多くの気づきを得ていた。例えば、弊社の事業所のすぐ近くにあるキジバトの巣と、その場所での子育ての様子には、「いつも通っていたのに気づけなかった」と感動する声が多かった。グループ会社である三井住友海上の駿河台ビル屋上庭園についても、「近くにあったのに屋上庭園での取り組みを初めて知った」との声が多かった。本ワークショップを通して、身近な地域を生物多様性という観点で再発見できたことが伺えた。

4. 今後の展望

本稿では、COVID-19 の感染拡大を契機に注目が集まっている“OneHealth”実現の文脈と、生物多様性保全の文脈の両方から、「人びとや企業、社会全体が、生物多様性やその価値、自身の生活や仕事との関係性、保全のための具体的な行動について認識すること」が必要であるとして、事業所の周辺地域で生物多様性を発見するワークショップを事例紹介とともに提案してきた。

本文では詳しく触れてこなかったが、従業員や地域の人びとが身近な地域の生物多様性を意識するようになることは、企業や地域の防災・減災力を高める上でも必要になる。現在、「グリーンインフラ」や「Eco-DRR (Ecosystem-based disaster risk reduction)」といった考え方が国内外で広まりつつある。グリーンインフラとは、自然の持つ人や環境の保全に役立つ様々な機能や仕組みを、インフラストラクチャー（道路・鉄道・上下水道・港湾・ダム・学校・病院・公園・福祉施設などの生活や産業の基盤となる施設のこと）の整備や土地の利用にうまく積極的に取り入れる考え方や方法のこと⁹を指す。Eco-DRR とは、生態系を活用した防災・減災のこと¹⁰を指す。このように、地域の生態的特性や成り立ちは災害に深く関わっている。つまり、防災・減災力を高めるためには、地域の生態的特性を従業員や地域住民が自分のこととして知っていることが必要である。本稿で紹介したようなワークショップは、さまざまな側面から企業や地域の持続可能性を高めるために必要であると考えられる。

企業や地域がその持続可能な経営のために、地域における生物多様性やその価値を身近な地域の中で見つける機会を、従業員や地域住民に提供する取り組みを推進していくことを期待したい。

MS&AD インターリスク総研株式会社 リスクマネジメント第三部
サステナビリティグループ 三島 らすな

MS & ADインターリスク総研株式会社は、MS & ADインシュアランス グループのリスク関連サービス事業会社として、リスクマネジメントに関するコンサルティングおよび広範な分野での調査研究を行っています。

環境・CSRに関するリスクマネジメント・コンサルティングを実施しております。

コンサルティングに関するお問い合わせ・お申込み等は、下記の弊社お問合せ先、またはあいおいニッセイ同和損保、三井住友海上の各社営業担当までお気軽にお寄せ下さい。

お問い合わせ先：MS & ADインターリスク総研㈱

リスクマネジメント第三部 サステナビリティグループ

TEL.03-5296-8913 <https://www.irric.co.jp/>

本誌は、情報内容についての完全性、正確性、安全性、最新情報等について保証するものではありません。また、本誌は、読者の方々に対して企業の CSR 活動等に役立てていただくことを目的としたものであり、事案そのものに対する批評その他を意図しているものではありません。

不許複製／Copyright MS & ADインターリスク総研 2021

⁹ 日本建設業連合会「グリーンインフラって何だろう？」2019年7月：

https://www.nikkenren.com/publication/pdf.php?id=311&fi=685&pdf=green_infra.pdf (2021年3月11日閲覧)

¹⁰ 環境省自然環境局「生態系を活用した防災・減災に関する考え方」2016年2月：

<https://www.env.go.jp/nature/biodic/eco-drr/pamph01.pdf> (2021年3月11日閲覧)